

源流の四季

第32号 (2009年1月) 冬



Winter

発行所/多摩川源流研究所 〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村4383
TEL 0428 (87) 7055 FAX 0428 (87) 7057
http://www.tamagawagenryu.net
E-mail:genryu@ec3.technowave.ne.jp
発行責任者/中村文明
協力/多摩川源流協議会(甲州市・奥多摩町・丹波山村・小菅村)
多摩川源流観察会
印刷/(株)サンニチ印刷



三条谷のカツラ(丹波山村 撮影 中村文明)

Contents 目次

「木づかい保健室」第一号が完成.....	2
ルーツを探り「大菩薩ヒノキ」と命名.....	3
「大菩薩ヒノキ」宣言.....	3
林業の未来に光を与える大橋式路網.....	4
大橋慶三郎先生にインタビュー.....	5
源流元気再生プロジェクト中間報告会.....	6~7
聖フランシスコ子ども寮自立の家が竣工.....	7
多摩川流域懇談会設立記念10周年記念シンポ.....	8
源流大学が実践する農環境教育と地域再生.....	8

「木づかい保健室」第一号が完成

ヒノキの間伐材を利用



先生や児童たちの笑顔がひろがる木づかい保健室

内閣府の「地方元気再生事業」の支援を受けて、小菅村が推進している「木づかい保健室」の第二号第二号が、小菅小学校・中学校に完成し、子どもたちや関係者に喜ばれている。小菅村では、森林資源を循環・活用することで源流の森を元気にしようと、保健室のコンクリートの壁を小菅のヒノキで張り替えた。北都留森林組合と協力してこの事業に取り組み、子どもや学校の先生たちから好評を得ている。

小学校の養護教諭の市川由美先生は、「森の中にいる気分で、心が落ち着いてくる。子どもたちが、香りにひかれて、保健室のドアを開け、保健室はいいと話しかけてくる。」と、木づかい保健室が子どもたちにも好評であると笑顔で答えてくれた。保健室のヒノキは、村有林のヒノキを間伐して、大橋式路網を利用し、搬出したもの。小菅村では、この成果をパンフレットにまとめ、流域の自治体へ普及するため営業活動を行っている。



第一号の完成祝い記念写真(10月5日)

営業活動で「感触はいい」

営業活動の先頭に立っている船木直光教育長は、狛江市、大田区、川崎市、稲城市、多摩市、八王子市、昭島市、武蔵野市を廻って「いずれも感触はいい。都内は多摩産材の活用が

叫ばれているが、源流の森を守るため多摩川源流材の活用を訴えている。」と語っている。

東京農業大学の宮林茂幸教授は、この取り組みの効果を次のように語った。

- 一、このヒノキは源流で植えられ育てられた環境に優しい木材です。
- 二、このヒノキは、大橋式路網を活用して搬出します。この木材を流域で利用し、資金が源流に還元されるため路網・作業道の開設が進みます。
- 三、木づかいの部屋とコンクリート部屋では、温もりに違いがある。木づかいの部屋は、子どもたちの体と心の健康作りに役立ちます。

ルーツを探り

「大菩薩ヒノキ」と命名

森林資源の活用めざし 第二回黎明祭

小菅村・多摩川源流研究所は、流域における森林資源の循環・活用や森林再生を目指す「多摩川源流百年の森づくり」を平

成十八年に開始した。今年度は、「源流元気再生プロジェクト」として小菅村のヒノキを活用した「木づかい保健室プロジェクト」が企画され、

摩川の河口・大田区の聖フランシスコ修道院から大勢の参加のもと、降矢小菅村長や建築家の神谷博さん、聖フランシスコ修道院の釘宮シスター、北都留森林組合の長田専務がそれぞれ挨拶した。降矢村長は、「小菅村は、森林再生を推し進め、森林資源を流域で活用することで、人工林を整備し、新たな仕事や雇用を生み出したい。そのためにも大菩薩ヒノキを大いに普及したい」と抱負を語った。

地元小菅小学校にその第一号が誕生した。源流のヒノキのより一層の利用拡大を願って、十一月三日、小菅村は、第三回黎明祭を開催し、

村の良質のヒノキを「大菩薩ヒノキ」と命名した。当日は、村民をはじめ北都留森林組合や多



河口の聖フランシスコ修道院と地元小菅の子どもたち(11月3日)

摩川の河口・大田区の聖フランシスコ修道院から大勢の参加のもと、降矢小菅村長や建築家の神谷博さん、聖フランシスコ修道院の釘宮シスター、北都留森林組合の長田専務がそれぞれ挨拶した。降矢村長は、「小菅村は、森林再生を推し進め、森林資源を流域で活用することで、人工林を整備し、新たな仕事や雇用を生み出したい。そのためにも大菩薩ヒノキを大いに普及したい」と抱負を語った。

続いて大菩薩ヒノキ命名式に移り、源流研究所の中村所長が「大菩薩ヒノキ」宣言を元気よく朗読、聖フランシスコ修道院の児童や小菅小中学校児童生徒、地主の木下大吉さんらによるヒノキの植樹を行った。最後に古家悦男議長が「村の誇りである大菩薩ヒノキが流域で普及することを期待します」と閉会の言葉をのべた。

「大菩薩ヒノキ」宣言

古来、小菅村では獵師達が「大菩薩嶺」に連なる熊沢山、天狗の頭、狼平の地先にある檜尾根(ひのきおね)に、誠に素質の良い天然のヒノキを見出しその苗を持ち帰り小菅の山々に広めてきた。

檜尾根と小菅とは地続きであったことから、このヒノキは小菅の気候や風土によくなじみ、小菅の大地にしっかりと根を張った。育ったヒノキを間伐してみると香りの良さやつやの見事に村人達は胸躍らせた。

ヒノキの材は、神社・仏閣に利用されているが、それは「千年の寿命」といわれるように、他のどの木よりも耐久性に優れていることがその理由であった。さらに、ヒノキは材質にムラがなく、特有の芳香と光沢があり、しっとりとした落ち着いた質感や加工しやすいことなどから日本というより世界でもトップを争う優良材であるとその評価は高い。

今、小菅村は、源流大学と連携し「源流元気ラボ」方式を基本に、「源流の木で家を造る活動」や「木づかい保健室プロジェクト」「多摩源流水普及作戦」などを柱とする「源流元気再生プロジェクト」を展開している。水や森林など源流に豊富にある資源を流域内で循環・活用することで、源流の森や郷を再生する仕組みづくりに全力で取り組んでいる。

すでに「源流の木づかいの家」や「木づかい保健室」第一号は完成した。現場で活用された小菅村のヒノキの評判は上々である。大菩薩嶺をルーツとするこのヒノキをより一層普及するために、村の誇りである良質のヒノキを「大菩薩ヒノキ」と命名する。

小菅川の源頭におわします「北斗妙見大菩薩」のご加護のあらんことを祈念しつつ、ここに「大菩薩ヒノキ」の誕生を高らかに宣言する。

平成二十年十一月三日
多摩源流 第三回黎明祭

大橋慶三郎先生にインタビュー

不振にあえぐ日本の林業に、もう希望は見いだせないのか。戦後の拡大造林で植え付けられたスギやヒノキの人工林が、間伐や枝打ちもされないまま、真つ暗な姿を全国各地にさらけ出し、多くの国民が心を痛めている中、林業の未来に光を注いでいるのが、大橋式路網・作業路である。大橋式路網の哲学を先生にインタビューした。

(文責 中村文明)



道づくりの哲学を語る大橋先生

中村 まず、大橋式高密度林内路網のねらいは何か、教えてください。

大橋 急峻な山地での作業は辛く、また危険も伴うので、平坦地での作業環境に近づけるため、一畝に二百以上の密度で車が通れる、開設費の安い路を作設した。これによって、①一人でも木を伐つて出すことができる。②労働年齢を引き伸ばせる。③後継者が育つ。④緊急時に大いに役に立つ。――など長期間通行できる路がなくて、とても林業を続けることができないことを知った。

中村 なるほど。森林管理に大いに役に立つわけですね。「二人でも木を伐つて出すことができる」ことが、全国各地で実現すれば、林業革命が起こりますね。確かに、作業路がつけば、高齢者でも容易に現場に到着できる。林業の担い手も育つ。ところで、路の

付け方のポイントはなんでしょか。

大橋 路は誰でも付けられるが、問題はどこに、どう付けるかである。山の道は、諸刃の剣で、自然の掟を無視すれば、疫病神を呼び寄せるようなもので、えらい目に遭う。路を付けるときは、必ず山を見ることだ。地図や航空写真などの資料も大切だが、実際に現地で山を見ると、ペーパー(資料)では、見られぬものが見えてくる。

中村 確かに疫病神には、出会いたくないですね。貧乏くじを引いてしまうと単なる損失以上に山を壊してしまう。源流の水を濁してしまいます。目的に反する事が起きてしまいます。

大橋 路は、付けてはいけないところに付けないことが基本である。内部の状態は必ず外部に表れる。自然をありのままに見ること。山を見て、円やか、穏やか、厚みのある相は、内部も安定しているの。路を計画できる。ところが、険しい、削げた、曲がりくねった、尖った、薄い、乱れたなどの相は、不安定で良くないのでできるだけ避けるように路を計画している。自然の内部の状態は、すがたや

色に表れるので路の計画に限らず、いろんなことを教えてくれる師匠です。

中村 自然への観察眼が問われる世界ですね。自然は正直で素直である。自然は嘘を付かないわけですね。「ありのままの自然こそが師匠である」という大橋式哲学の心髄に触れた気がして、ゾクゾクとしました。

大橋 日本の林業地は、地形や地質の面で急峻で、断層など多くの変動で破碎しており、気象の面でも梅雨末期の豪雨、台風期の大雨が繰り返される。おまけに地震大国である。現実を分ける必要がある。

中村 納得できることばかりで、大橋式路網・作業路は本当に理に適ったやり方だということが分かりました。大橋式路網の作り方について教えてください。

大橋 幹線をどこに付けるのか、支線はどこを横切るのか。山の尾根は、堅くて強い。ここに幹線を設置するのがいい。支線は、幹線に繋げるもので、ヘヤピンカーブを利用して、水平に付けるといい。山の中腹斜面は、大切な表土が深く柔らかい。尾根は、崩れやすいが中腹の斜面は崩れやすいので、中腹に広い道を付けるのは危険だ。高密度路網では、中腹を通る支線は、幹線より路幅が狭いのが自然の理である。

源流元気再生プロジェクト中間報告会

賑やかで元気ある循環型の源流創造へ

小菅村・源流研究所は、源流元気再生プロジェクト運営委員会と共同で、十二月四日、小菅村役場二階会議室で源流元気再生プロジェクト中間報告会を開催し、これまでの活動の成果や到達点、課題を報告しあい、アドバイザーから様々な角度でコメントをいただいで、「源流らしさを取り戻し、賑やかで元気ある循環型の源流域を創造する」との目標に向かって奮闘することを意思確認した。

佐藤源流振興課長の司会進行で進められた中間報告会では、降矢英昭村長と小泉守運営委員長、高橋裕東京大名誉教授、国土交通省河川局河川環境課の舟橋弥生課長補佐がそれぞれ挨拶した。降矢村長は「今夜は運営委員の皆さん、そして村民の多くの皆さんにご出席をいただき、ご苦勞様です。本日は、高橋先生、舟橋先生、藪田先生、渋沢先生、鈴木先生、山道先生、神谷先生には大変お忙しい中、ご参加いただき心より感謝を申し上げます。本日中間報告会が、プロジェクトの後半に向けての、また更には、来年度の計画に向けての有意義な会議になりますよう期待します」と参加者を激励した。

高橋先生をコーディネーター役にして開始された報告会では、最初に中央大学経済学部の藪田教授が「環境経済学から見た源流」というテーマで話題提供を受けて、「木づかい研究室」(古屋金男室長)、「源流産業開発研究室」(亀井雄次室長)、「健康づくり研究室」(守重広子室長)、「森林再生研究室」(木下栄行室長)、「源流文化研究室」(木下正之室長)から、研究室の主な取り組み、進捗状況、今後の課題に関して熱心に報告が行われた。各研究室の中間報告を受けて、アドバイザーから貴重なコメントをいただいた。

「トップランナーをめざせ」

(船橋課長補佐)

「逆に、聞いていて仕事をすすめる上でアドバイスを頂いたよう



源流元気再生中間報告会(12月4日)

な感じで勉強になった。例えば、木づかい保健室。ネーミングに気持ちの「気」がかかっているのかなという感じもして、発想が非常にいい。ヒノキ材を使うの一番いいところがいいモデルを作ったなというふうに感心している。こういうのも発想を最初にして、トップランナーでいく。トップランナーでいく時にも、常に改良とかいろいろなことを考えながら、ユーザーのニーズに応えてやっていくといい。小菅がやはり日本一だなどと思わせるような何かをやっていくためには、最初に作った保健室みたいなモノを例にどんどんどんどんいろいろな商品に改良を加え

てやっていくというのが一番いいんじゃないかなと感じた。」

「ブランドの軸を立てる」と

(藪田雅弘先生)

「各研究室とも一生懸命やっておられます。全体として、小菅ブランドの話ですけど、何でもかんでもブランドになるわけではないと思うんですね。ですから一つの考え方はブランドとして、なにか軸になるものを展開していくという考え方。また、全体として一つのマーケティングで、例えば保健室の部会のプロジェクトで売り込みに回られたと言われたんですけど、その時、源流水ももっていく。

それから観光もアピールするというような複合的なマーケティングというものもこれから多分行われると思う。そうすると、小菅は全体として、変ないい方ですけど、コーポレーションとか、共同企業みたいな形で頑張っているということが出てきて、相当複合的な効果が生まれるんじゃないかという気がします。」

「とにかく小菅の中で」

(渋沢寿二理事長)

「皆さん、これはすばらしいと思われても、日本の全国山村にたくさんある場合もございいます。その中で確実に小菅にだけしかないものという、源流大学、要するに若い者を育てる仕組みを小菅は持っているというところ。源流元気ラボがある。それに対して今回国の予算が付いて、皆さんの活動に繋がっているということなので、やはりこの源流大学を逆に皆さん側からみるとどうやって活かしていくかということをして是非お考え頂きたい。

木づかい保健室の場合、やはり人に売るなら、自分たちが良いと思わないと絶対売れないというのが鉄則でございます。とにかく小菅の中で小菅材を使う。外から来た人たちがこれ小菅の山から出てきてる

んですよということ、先ず、小菅で小菅材を使う方法をどう考えるか。これは本当は行政にお願いして、行政の施設は全部小菅材でやって下さいということが一番いいんでしょ。うが、なかなか予算の関係とかでそうならないでしょうから森林組合の皆さんとご協議をしながらなるべく安価な買いやすい価格で材の普及を考えていただきたい。」

「お弁当はいろんなランクを」

(鈴木真智子代表)

「私も感動して聞いていました。この腰板の第一号が私のおります川崎市多摩区のせせらぎ館の会議室にございいます。腰板に山梨県小菅村のヒノキと書いて宣伝している。川崎市長も口を開けば多摩川、多摩川と言ってくれる、そういうところなので、この源流の地域を私達が市民の力で先ず、応援したいと思っております。文明さんから、元気再生通ったよと聞いたときは本当にうれしくて、手を叩いておりました。

お弁当の件ですが、渋沢先生と同じでいろいろランクがあるのは正直言って高いなと思いません。ただし、お金持ちの人たちがツアーリズムで来たときは千円のお弁当を出して下さい。我々みたいな子どもを連れて来るときにはちよつと安めがいいか

聖フランシスコ子供寮自立の家が竣工

源流の木で家をつくるプロジェクトの第二号がようやく完成した。多摩川の河口に位置する大田区の久が原に、宗教法人カトリックお告げのフランシスコ修道会と社会福祉法人・聖フランシスコ子供寮はあ。ここに、十二月七日、聖フランシスコ子供寮自立の家が、源流の木をふんだんに活用して完成し、その竣工を祝う会が開かれた。

祝う会には、フランシスコ修道会と聖フランシスコ子供寮、神谷先生など工事関係者、小菅村、源流研究所、北都留森林組合、小菅村ゆうゆうクラブなど百五十名が参加した。

祝う会では、フランシスコ修道会の釘宮スターが、「福祉施設は、十八才になると施設から出て行かなければならない。家に困った子供達は、物置同然の小屋に寝泊まりしても我慢して生活した。十八才過ぎてからの人生をなんとかしてあげたい一心でみんな協力し



て自立の家が出来た。源流から頂いた木の香りは、きつと子供達の心を癒してくれるだろう。私たちの願いや思いを受け止めて、子供達は他人を大切に出来るような、この世の光になってほしい」と語りかけた。

設計を担当した神谷先生は「ようやくこの日を迎えることができた。完成までの道のりは、短くなかったが、この日を待っていただけに感無量だ。何故源流の木を使ったのか。その木を生み出す森が荒れている。源流の木で家をつくることは、森林を再生し、水を作り出し、山を維持する村を支えることになる。何故木の家なのか。生き物である木の命を分けて頂いてできた家は、無機質な都市にあつて木の香りに包まれ、潤いに満ちた安らぎの場になる。何よりも木を使えば、森林再生に取り組んでいる小菅村と連携出来る。」と挨拶した。

小菅村から参加した船木幸一さんは「完成した自立の家を見て驚いた。小菅の木が使われて感無量」と語り、守重元恵さんは「家に入るとたん、木の香り、木のぬくもりを感じた。小菅から来た木に触れて嬉しかった。フシも少なく年輪もきれい。スターのこの家が完成するまでの話を聞いて感動した。」と語った。また、古屋守子さんは「木の香りが心地よかった。東京で小菅の木がこんなに立派に役に立っていて嬉しかった。神谷先生に感謝したい。素晴らしいスターに恵まれて子供達もよかった。」と述べた。

など。そういうランクをいろいろ作っていただければと思いましたが、この前、小金井市の特産のお弁当が出たんですが、おかげで全部由来が書いてありました。是非、そういうのも、研究してほしい。」

「科学的な視点を付加する」

(山道省三代表)

「単純に板をつければそれで良いという話ではなく、これは何を意味するのかというあたりを少し科学的な視点をもつてやるといのが、これは将来に繋がっていくことになるだろうと思います。これは何も木づかいだけの話じゃなくて、食の話とか他の研究室のテーマの中に、科学的な視点を付加すると、なにかとんでもないことが起きそうな感じがしましたので、是非そこらへんのところを考えていただければいい。川のほとりに病院があるんですけども、その堤防に病室から車いすで川に降りて、一時間でも散歩をした人の血糖値だとか血圧だとか薬の効き方だとか、睡眠だとか食欲増進がガラッと変わるといデータを何年も取っておられるんですね。こういう視点をもつておられると、保健室だけじゃなくて病院とかそういうところにこういうものを設置する意味というのが大きな役割を持



元気再生の各研究室長

つ。それだけでも、もしこれを売るとすればセルスのポイントに充分なる。これが要するに源流大学とくつついていくということになれば本格的なブランドになっていくと思つた。ぜひそこら辺の視点をそれぞれの研究室で持つて頂くといいかなと思う。」

「丁寧な対応、心のこもった対応」

(神谷 博先生)

「小菅のヒノキのブランド化というのはここ何年来の課題だったんですが、ようやくここに来て、大菩薩ヒノキという命名ができた。それもただのブランドではないと。どういうブランドかというときに、大変いい発想だったと思うんですけど、大菩薩のヒノキというものがあつて、原種のようなヒノキがある。そういうことを探して来て、そういうお話ができる。ストーリーにした。ただ名前を付けたというだけではなくて、大変素晴らしい話だと思つた。同じ話が、実は今、ワサビでも出てますね。小菅本来のワサビの原種といいますか、ブランドというのは自分たちのもともと持っている、本来のものを掘り出してブランド化していく、そういうものだとおもうんですね。そのいいものをいかにいい値段でちゃんと売るかということが大切だと思つます。そのときにはたくさんは売れなくてもいいですね。小菅村はいろんな意味でやはりキャパシティーが限られていると思つます。人も少ないです。そこで多量になにかするというのは難しいので、僕はそういうキャパシティーに合った丁寧な対応、心のこもった対応が出来るといことが小菅の売りではないかなというふうに思つています。」

多摩川流域懇談会設立十周年記念シンポ

今後とも川は国が管理すべきだ

より良い多摩川の実現に向けて市民、企業、学識経験者、流域自治体、河川管理者などが、緩やかな合意形成を図ることを目的に平成九年十二月十九日に結成された多摩川流域懇談会の設立十周年を記念して、平成二十年十二月二十九日、調布市文化会館たづくりくすのきホールで、「多摩川の歴史 これまでの十年、これからの十年」をテーマに「多摩川流域懇談会十周年記念シンポジウム」が開催された。

主催者を代表して、多摩川流域懇談会の高橋裕裕会長が「流域懇談会ができて十年間、何をしてきたのだろう、どんな成果があったのだろうか、足りないものは何だったんだろう、を反省しつつ、その反省に基づいてこれからどう考えたらいいのか大いに議論して欲しい」と開会の挨拶を述べた。

続いて調布市の長友貴樹市長が「調布市を含めて流域の町は古代より

多摩川とともに生活をして歩みを重ねてきた。流域の多くの市民が多摩川に憩いを込めて生活をしている。愛着の上ない存在として多摩川が私どもの生活に根づいている。懇談会の場を通して、多摩川を大切にする機運が盛り上がることを期待する」と歓迎の挨拶を送った。

「川は生命の宿り」をテーマに基調講演した財団法人日本自然保護協会顧問の柴田敏隆さんは「川で生活する生き物たちは陸から流れ込む栄養塩類を原則として食物連鎖の中で暮らしているが、これが元で川の中にいろんな生き物、動物たちが生命を宿すことができる。すごく大事なことは、野生の生存権を大事にしよう、水とか、川とか、自然は、私たちだけのものではない。先祖代々受け継いできて、未来世代に伝えるべきではない。」と語られた。休憩時間には、桐朋学園大学音楽部の音楽演奏が披露され、大きな拍手に包まれた。

パネルディスカッションに参加した柴田敏隆さんは「この十年間、多摩川の自然環境ははつきりいつて悪くなっている。自然保護運動は、自然を人間が壊すことに反対している

運動だ。十年ぐらいでいい意味で変わったのは、河川環境課に地域連携係ができたことだと評価している。河川環境保全モニター制度ができたことだ。また、自分たちはどうしたいかが大切で、多摩川の現実がどうであるかをしつこく徹底的に見ていきたい。また、川は国が管理していくべきだ。」と強調した。

行政側の総合力の発揮に期待の声

栗原さんは「流域懇談会を通し、その過程で感じたことは、行動する市民、責任を自らとれる市民、それが多摩川に非常にたくさんいることを痛感した。市民の力は育つてきているが、これからの多摩川をどうしていくのかというとき、行政というものがもう少し総合力を持って対応していけば、もっといい多摩川になるのではないかと指摘した。鈴木真智子さんは「北海道で育つて、多摩川で子どもの声が聞こえなかった。何で川があるのに子どもたちは遊ばないのか、変だなと思ったのが、今の活動に入るきっかけだった。川崎市の自然の少ない中、いかに子供たちと一緒に楽しんだり、学んだり、泣いたり、笑ったりしていけるか模索してきた。学校は、身近な多摩川を教材として利用していない。今後の目標は、学校のカリキュラムにこく普通に

取り入れられるようになってくれるといい。」と今後の抱負を語った。また、源流の小菅村から参加した佐藤源流振興課長は「源流にこだわった村づくりを進め、源流大も学も入るなど多摩川の方々が小菅村に入ってきたらいい。それが何よりの元気になっている。これから流域の方々とパイプを拡げながら、山を守り、水を守り、いい川、いい多摩川を守っていききたい。」と述べ、大きな拍手が送られた。



多摩川写真二人展

最後に、鈴木研司京浜河川事務所長が「今日のパネルディスカッションでいろんな意見があったが、今後とも多摩川流域懇談会でのいろんな意見を戦わせながら、包括的に多摩川をよくしていきたいと思っている。よりよい多摩川づくりを皆さんと一緒に考えていきたい。」と閉会の挨拶を行った。

東京農業大学 現代GPフォーラム
「多摩川源流大学が実践する 農環境教育と地域再生」

日時 平成21年1月31日(土) 13時
会場 東京農業大学世田谷キャンパス 百周年記念講堂

時間 12時 13時

内容 開場
第1部フォーラム
学長挨拶 大澤貫寿先生
小菅村長挨拶 降矢英昭
報告1
宮林茂幸(東京農大教授)
「多摩川源流大学の活動実施概要」
報告2
石坂真悟(東京農業大学学習支援課)
「源流大学体験実習の カリキュラムと評価」
報告3
佐藤英敏(山梨県小菅村役場)
「受人側から見た 多摩川源流大学の効果と課題」
報告4
学生発表

14時45分 第2部ミニシンポ
テーマ「源流大学における 今後の発展の可能性」
パネリスト/木俣美樹男氏
山道 省三氏
中村 文明氏
小泉 守氏
植村 春香氏
学生(2名)
コーディネーター/宮林茂幸先生
16時15分 終了

問合せ先 東京農業大学学習支援課
GP事務室
☎〇三―五四七七一―二四七



多摩川流域懇談会十周年シンポ